

南ボルネオのイスラム改革運動

利 光 正 文

はじめに

インドネシアのイスラム改革団体ムハマディヤは、1912年中部ジャワの古都ジョクジャカルタにおいてK. H. アフマド・ダフランによって設立された。ダフランの会長在任中ムハマディヤ支部はジャワに限られていたが、彼の死後1925年より支部はジャワ以外の島々（外領）に拡大する。スマトラ、セレベス、ボルネオにムハマディヤ支部が相次いで誕生し、ムハマディヤの勢力拡大は一気に加速した。中でも、イスラム改革運動の先進地西スマトラ（ミナンカバウ）にムハマディヤ支部が誕生した意義は大きく、ここはその後イスラム改革運動の一大中心地として発展することとなる。

ところで、本稿で扱う南ボルネオのムハマディヤ運動については、筆者は既にムハマディヤのアラビオ支部とクアラ・カプアス支部の成立に関する小論を発表している⁽¹⁾。そこで、今回はバンジャルマシン支部の動向及び女性組織アイシャについて述べることにする。特に、アイシャについての研究はまだあまりなされておらず⁽²⁾、解明されるべき事柄が多々残されていると思えるからである。

1 ムハマディヤ成立以前の南ボルネオ

南ボルネオのイスラム史に関する研究会が1976年バンジャルマシンで開催された。この研究会にはインドネシアのイスラム研究者の殆どが参加、その成果が『Seminar Sejarah Kalimantan Selatan (Bagian Sejarah Islam) (南カリマンタンの歴史セミナー (イスラム部会))』⁽³⁾として刊行された。その報告書あるいはその他によると、南ボルネオへのイスラムの伝来については、まだ不明な点が多いようであるが、グレシク（東ジャワ）のイスラム化に尽力したスナン・ギリが1470年頃南ボルネオを訪れることによりイスラム化の第一歩が印されたようである⁽⁴⁾。そして、15世紀の前半に成立していた南ボルネオのバンジャル王国がイスラム国家となるのは、スルタン・スリアンシャーが統治した16世紀の終わりから17世紀前半にかけての頃であったとされている⁽⁵⁾。18世紀になると、大ウラマと呼ばれたシェク・アルシャド・アル・バンジャリが出てバンジャル王国のイスラムはより強固なものとなった⁽⁶⁾。しかし、18世紀はまたオランダがこの地に進出した時期でもあり、バンジャル王国は協定の締結によりオランダの主権を認めている。

更に、バンジャル王国へのオランダの侵略が本格化するのは19世紀になってからのことで、王位継承紛争への介入後戦争となり（バンジャルマシン戦争）、1860年バンジャル王国はオランダの直轄領となり、王制は廃止された⁽⁷⁾。19世紀のバンジャル王国では、メッカ巡礼をしたハジ達が多額の富を形成し、交易と宗教指導においてのみでなく政治的伝統の固守においても重要な役割を果たしていた。彼らは異教徒に対するジハード（聖戦）と救世主（イマム・マフディ）の出現を期待する思想を掲げ、オランダの侵略に対して抵抗した。スルタン位継承にからむ内紛からバンジャルマシン戦争が勃発した時、ハジ達を中核とし農民をも巻き込んだ反オランダ勢力は激しい抵抗を試みて、オランダに各個撃破されて行った⁽⁸⁾。バンジャル王国を直轄領としたオランダは、多数のオランダ人官吏を派遣し植民地支配を貫徹させる。

さて、オランダの直接統治下、南ボルネオの都市バンジャルマシンは王国時代と同様にイスラムの強い地として、あるいは交易の中心地として繁栄する。20世紀になると、イスラム改革運動が南ボルネオに影響を与え始めた。改革団体ムハマディヤは、1920年代にクアラ・カプアス（現中カリマンタン）とアラビオ（アムンタイ）において先ず支部を設立する。バンジャルマシ支部の成立は1930年であった。バンジャルマシ支部が遅れた理由は、恐らくこの地がオランダ支配の拠点であったので、活動に対する何らかの制約が加えられていた為であろう。更に、バンジャルマシではイスラム伝統派の団体ナフダトゥル・ウラマ（ウラマの覚醒）もこの時期盛んに勢力の扶植を図っていたので⁽⁹⁾、ムハマディヤの運動が若干出遅れたのかもしれない。いずれにせよ、バンジャルマシが南ボルネオにおけるムハマディヤ運動の中心となるのは、1930年代に入ってからのことである。

ここで、1930年の人口統計を見ておくと、バンジャルマシは64,223人、クアラ・カプアスは8,691人であった。その内、ヨーロッパ（オランダ）人は、バンジャルマシが1,022人、クアラ・カプアスは12人である⁽¹⁰⁾。後者の比率が著しく低いのが分かる。こうしたことから、オランダ人の手薄なクアラ・カプアスに先ずムハマディヤの支部が1927年に設立され、29年にアラビオ、30年にバンジャルマシへと続いたものと思われる。アラビオ（アムンタイ）は経済力を持つメッカ帰りのハジ達の一大拠点であった⁽¹¹⁾。

2 ザムザム・アイディド (Zamzam A'idid) とムハマディヤのバンジャルマシ支部

南ボルネオにムハマディヤが影響をおよぼすのは、1920年代のことである。アラビオ出身の商人H. ウスマン・アミンは長くスラバヤに住み、スラバヤのムハマディヤ幹部達と知り合いになった。スラバヤでは1921年にムハマディヤ支部が成立しており、東部ジャワにおけるムハマディヤ運動の中心となっていた。1923年にムハマディヤ会員となったH. ウスマン・アミンは1925年アラビオに戻り、ムハマディヤ・アラビオ支部設立に向けて尽力する。アラビオのムハマディヤ支部設立に貢献したもう一人の人物は、H. ジャフリである。彼は、アラビオのプサントレン（イスラム塾）でイスラム教師として教えるかたわら、メッカに留学、帰国後の1914年にはイスラム同盟に入党し行動的なハジとして頭角をあらわす。ムハマディヤとの関わりは、彼の息子がジョクジャカルタのムハマディヤ学校（HIS met de Quran）に入学したことにより始まり、アラビオにムハマディヤ支部を創立するための幹部要員となることによって、より深まった。こうした人々の努力の結果、アラビオのムハマディヤ組織は1927年準支部となり、29年正式に支部として発足した⁽¹²⁾。

さて、バンジャルマシとアラビオは河川交通によって結ばれており、お互い緊密な関係にあった。バンジャルマシは南ボルネオの中心都市であるばかりでなく、海の玄関口としての機能も果たしていた。特に、スラバヤとの定期航路が開かれており、ジャワからの情報が最も早く入手出来た。しかしながら、前述したように、バンジャルマシでのムハマディヤ組織化はクアラ・カプアスやアラビオよりも遅かった。ムハマディヤに関する根本的史料である機関誌『スアラ・ムハマディヤ（ムハマディヤの声）』や『アルマナック・ムハマディヤ（ムハマディヤ年鑑）』には、1930年までバンジャルマシについての記述は見られない。そこで、バンジャルマシのムハマディヤ運動に関しては一人の人物を取り上げ、その足跡を追うことにより運動そのものを考察する手がかりとしたい。その人物とは、ザムザム・アイディドである。彼はバンジャルマシにおける初期ムハマディヤ運動の指導者であったばかりでなく、南ボルネオのムハマディヤを代表する最高幹部でもあった。ザムザム・アイディドについては、死後、彼の後継者であるフドゥリ・タイプが追悼文の中で

略歴 (Biografie Ringkas)⁽¹³⁾ を紹介しているので、以下それに依拠しながらその生涯を見る。

ザムザム・アイディドは、1902年バンジャルマシンに生まれた。彼はバンジャルマシンのオランダ・インドネシア人学校 (H I S) を卒業後、当地で高名なウラマ (イスラム教師) の A. H. ジャマルディンに師事し、3年間彼にイスラム学の手ほどきを受けた。その後、アイディドはバンジャルマシンでイスラム学校の教師となった。数年して、彼はイスラム教師の職を辞し東ボルネオに移住、商人の世界に身を投じている。大きな信用を得たアイディドは、サマリダの有名な一人の商人と事業を始めた。1931年バンジャルマシンに戻り、彼はムハマディヤに入会した。ザムザム・アイディドが会員となった時、バンジャルマシンのムハマディヤ会員数は29名であった⁽¹⁴⁾。

ムハマディヤがバンジャルマシンで活動を開始するのは1922年頃で、その組織化にあたってはミナンカバウ (西スマトラ) 出身の A. R. スタン・マンズルが重要な役割を果たしている。彼はその当時プカロンガン (中部ジャワ) のムハマディヤ支部委員長をしていたが、ムハマディヤ中央本部よりバンジャルマシンに派遣され、ムハマディヤ組織化に奮闘していた⁽¹⁵⁾。バンジャルマシンにムハマディヤ支部が成立するのは1930年のことである⁽¹⁶⁾。翌年、イスラム同盟をはじめとするいくつかのイスラム団体が共催してバンジャルマシンで開かれたウンマ覚醒委員会にムハマディヤ・バンジャルマシン支部も参加している⁽¹⁷⁾。

さて、ザムザム・アイディドがムハマディヤ会員となった頃、バンジャルマシンではムハマディヤに対する様々な妨害があった。特に、カンボン (地区) ・トゥルック・ティラムの住民は誹謗や中傷を行った。しかし、これらの妨害に対し、ザムザム・アイディドはその先頭に立って戦い、町や村のあちこちで宣教活動を続けながらムハマディヤへの支持者を増やして行った。彼は又、かつて商人として活動した東ボルネオへも出かけ、コタ・バルやバリクパパンでのムハマディヤ・グループ (準支部) の設立に奔走した。この様な貢献が認められ、1933年バンジャルマシンで開かれた南ボルネオ地域 (dairah) ムハマディヤ委員会に於いて、ザムザム・アイディドは初代コンスル (全権代理) に選出される⁽¹⁸⁾。彼は、名実共に南ボルネオを代表するムハマディヤの顔となったわけである。アイディドがコンスルをつとめるのは1936年までの3年間であるが、この間35年7月にバンジャルマシンで第24回ムハマディヤ会議が開かれており、南ボルネオのムハマディヤにとっては運動の基盤を確立する上での最も重要な時期であったと言えよう。しかし、この様な激務が次第に彼の体を蝕み、病を得1940年2月8日東部ジャワ・マランの病院に入院、2月16日家族に看取られながらこの世を去った。享年38才⁽¹⁹⁾。あまりにも若すぎる死であった。彼の死は、1929年2月40才で急死したムハマディヤ中央本部副会長 H. ファフルディンよりも早く、南ボルネオのムハマディヤ運動にとって大きな痛手となった。

ところで、ザムザム・アイディドがコンスルに就任した当時、南ボルネオにおけるムハマディヤ運動の活動状況はどのようになっていたのだろうか。以下、統計表により見て行くこととしたい。

表1 ハマディヤ・南ボルネオ地域の会員数（1932年）

支部及び準支部名	男性	女性	合計
クアラ・カプアス支部	88		88
アラビオ支部	651	139	790
ジャランクアンタン準支部	45	51	96
マンドゥマイ準支部	51		51
バンジャルマシン支部	261		261
バピナン・ウル準支部	43		43
カソンガン準支部	15		15
クタ・バル準支部	44		44
バリクパパン準支部	37		37
合 計	1,198	190	1,388

出所) Pemandangan Alam Islam dan Moehammadijah, H. B. Moehammadijah, Djokjakarta, 1932, p.104.

この中でクタ・バルとバリクパパンは東ボルネオであるが、ムハマディヤでは南ボルネオのダイラ（地域）に含まれていた。ムハマディヤ中央本部は、支部や準支部の増大により1929年からダイラ制を導入、それぞれのダイラに順次コンスルを置いて統括させた。1929年には19のダイラが設けられ、南ボルネオは19番目のダイラとされたがコンスルはその時点では置かれておらず、1933年に初代コンスルが誕生した⁽²⁰⁾。コンスルの選出はそれぞれのダイラ毎に行われ、最も著名な人物がコンスルとなった。上記統計表では、準支部が増え会員数も増加しており、南ボルネオ地域の運動充実ぶりが窺われる。

次に、教育活動に目を転じよう。アラビオにおいて、1922年5年制の標準学校（Standaard School）が創設された。ここでは、宗教科目とともに一般教育のそれも教えられた。引き続き、この上に2～3年制のコーラン付継続学校（Vervolgschool met den Qor'an）が開設された。1928年、コーラン付継続学校は3年制のウスタ学校（Woestha School 宗教中等学校）となって独立した⁽²¹⁾。これらの学校の教師及び生徒数は以下の通りである。

表2 アラビオのムハマディヤの学校（1930年）

学 校 名	教 員 数		生 徒 数	
	男	女	男	女
標準学校	8		150	73
ウスタ学校	2		8	2
アイシャ（Aisjijah）学校		1		40

出所) Berita, Pengadjarn Moehammadijah Hinsia-Timoer, 1930, p. 42.

表中アイシャ学校とは、ムハマディヤの女性組織アイシャが運営する学校である。尚、同年、クアラ・カプアスでは、標準学校（男性教師3、男子生徒38、女子生徒17）とイブティダイヤ（Ibtidaijah イスラム初等学校）（男子教師2、男子生徒17、女子生徒4）があった⁽²²⁾。しかし、前述の『Berita』中にはバンジャルマシンの学校は記載されていないので、まだムハマディヤの学

校は存在していない。ただ、バンジャルマシンにも1932年にはムハマディアの3年制国民学校(Volksschool)と標準学校が創立されている⁽²³⁾。南ボルネオではアラビオ支部の活動が目立っているが、1933年よりダイラのコンスルがザムザム・アイディドとなり、事務局もバンジャルマシンに置かれたことにより、ムハマディアの南ボルネオにおける中心はバンジャルマシンとなった。

3 第24回ムハマディア会議 (Congres Muhammadiyah)

ザムザム・アイディドがコンスルに就任以来、南ボルネオのムハマディア運動の歩みは順調であったが、バンジャルマシンでは大きな行事が待ち受けていた。それは、第24回ムハマディア会議の開催である。1912年にムハマディアが創立されて以来、会議は毎年開かれていたが、ジャワ以外の地では19回ブキティンギ(スマトラ)、21回マカッサル(セレベス)に次ぐ開催であった。当時のムハマディア会長は第3代K. H. ヒシャムであり、ムハマディアの勢力が外領に大幅拡大を続けている時期でもあった。会議の開催は、ムハマディアの会員のみでなく会員以外の人々に対しても大きなアピールとなった。加えて、開催地には他地域から多数のムハマディア会員が参集するので、金銭的にもその地が潤った。

1935年7月15日～22日まで、バンジャルマシンで第24回ムハマディア会議が開かれた。準備委員会によると、参加者は、ムハマディアのレセプションに1,500人、アイシヤに500人、閉会式にはムハマディアに3,000人、アイシヤに1,000人、プムダ(ムハマディア青年組織)に1,000人、そして、男子生徒500人、女子生徒500人であった。会議そのものへの出席者は、ムハマディア支部及び準支部88の代表143名、アイシヤ支部及び準支部31の代表59名、プムダ支部及び準支部27の代表51名であった⁽²⁴⁾。

会議の具体的内容については、機関誌『スアラ・ムハマディア』の記述を手がかりとしながら見てゆきたい。レセプションにはオランダ植民地政庁の官吏、新聞記者その他いくつかのイスラム団体の代表が招待されていた。オランダ植民地政庁は集会・結社には神経を尖らせていたので、ムハマディア会議には政庁役人を招くのが常であった。レセプションでは、コーランの読誦とムハマディアの歌がムハマディア学校の生徒達により歌われている。開会式においては、ムハマディア会長のH. ヒシャムがフトバ(説教)を行った後、マラン支部のノール・ヤシンが「パン・イスラミズムに対するムハマディア」、ジョクジャカルタ支部のR. H. ハジドが「預言者の偉大な仕事」と題し演説をしている。会議は午後を休息とし、午前中と夜間行われた。会議では、ムハマディア運動についての活発な議論が展開された。例えば、これまでの運動の総括に関する事、中央本部メンバーの増員に関する事、福祉・衛生会議とタンウィル会議(コンスル会議)設立に関する事、会員の経済活動に関する事、広報活動に関する事、等々様々な討論が深夜に及び繰り広げられた。その間、各支部の著名なリーダー達による演説も行われている。ミナンカバウ支部のA. R. スタン・マンズル、スラバヤ支部のM. マンズル、ソロ支部のS. A. シャバル等、更に中央本部リーダー達等が入れ替わり立ち替わり演説している⁽²⁵⁾。

さて、第24回ムハマディア会議の決議事項はいかなるものであろうか。まず、外国にムハマディアの子ども達を留学させる事が議論された。そのための手だてとしてプタウィ(ジャカルタ)支部の中に委員会を組織することが委ねられた。次に、クルバン(犠牲祭)のための動物の肉片の費用の自由解放を植民地政庁に請願する事が決議された。更に、中央本部役員数を現行の9名から4名増員して13名にする事が決められた。加えて、ヤヤサン(Jajasan 財団)の廃止。

ムハマディアの組織運営は会費と会員及び支持者からの寄付で賄う事。その他、福祉会議の設立、

ソロで発行されている広報誌『アディル』の充実等が決議された⁽²⁶⁾。尚、アイシヤはムハマディヤと同時並行して会議を行っていた。こうして8日間に亘る会議は終了した。

この会議の期間中、ムハマディヤ会員を始めとするたくさんの人が集会に集い、バンジャルマシンは一時ムハマディヤの町と化したと言っても過言ではなかったろうと想像される。そして、会議を無事終えた南ボルネオ地域のムハマディヤ会員にとっては大きな自信となるとともに、ダイラ南ボルネオのムハマディヤ運動はその基礎を確立したと言えるのではなかろうか。会議が開かれた当時の南ボルネオ地域のムハマディヤ支部を以下に図示する。

図 南ボルネオ地域のハマディヤ支部 (1935年)



1939～40年にかけての南ボルネオ（東部も含む）のムハマディヤの状況は、支部・準支部33、会員数2,598（内女性836）、礼拝所20、学校30、生徒1,438人、教師43人であった⁽²⁷⁾。この数を見れば、南ボルネオにおけるムハマディヤ運動の順調な発展ぶりが理解出来よう。

4 アイシヤ運動

アイシヤは、ムハマディヤの女性組織として1918年中央本部副会長H. ムフタルの提唱により、ムハマディヤ創立者K. H. アフマド・ダフランの教え子の女性中のエリート達を中心となり、設立された。組織体系はムハマディヤと全く同じとし、初代会長にはシティ・バリヤーが就任、支部や準支部を各地に作って行った⁽²⁸⁾。勿論、ムハマディヤと緊密な連携を取りながら組織化を進めるかたわら、機関誌『スアラ・アイシヤ Soera Aisjijah』（以後『S・A』と略記）を1926年に創刊、ムスリム女性の啓蒙団体としての機能を着実に果たして行った。

ところで、南ボルネオにおけるアイシヤ運動は、1920年代の末頃を出発点としている。『S・A』での所見は1929年で、8月19日クアラ・カプアスのアイシヤが預言者ムハンマドのマウルド（聖誕

祭)を行ったとある。この会はアイシャ責任者H. シティ・エシャーが主宰、約100名くらいの男女が参加し、ムハマディヤのクアラ・カプアス支部から3名の代表が出席、ムハンマドの生誕を厳かに祝った旨が記述されている⁽²⁹⁾。同様に、12月19日預言者ムハンマドのミラージュ(昇天祭)も行われている⁽³⁰⁾。クアラ・カプアスのアイシャ支部の正式発足集会は、1932年2月26日に開催されている。発足式にはアイシャ会員25名が参加、来賓としてムハマディヤのクアラ・カプアス支部副委員長アフマッド・イブンが出席した。支部役員には、以下のメンバーが選ばれている。

支部委員長	シティ・エイシャー (H. Esjah)
支部副委員長	” ムスリミン (Moeslimin)
第一書記	” ウムット (Oemoet)
第二 ”	” アチ (Atji)
会計	” イウィン (Iwing)
委員	” マヒバー (Mahibah)
”	” アルー (Aloeh)
”	” アルー・アチル (Aloeh Atjil)
”	” ニャイ (Njai)
”	” ウジャウ (Oejau)
”	” ハディジャー (Hadidjah)
”	” ミナー (Minah)
”	” ウスン (Oesn) ⁽³¹⁾

同年、『S・A』誌上にシティ・ウムリヤーなる女性が「クアラ・カプアスのアイシャからの叫び」と題する詩を載せた。これは11篇からなる詩であるが、その内の3篇を次に紹介したい。

5. ああ、ジャワの皆さん ボルネオの人々は大いに失望しています
わたしたち全員を助けて下さい 早く前へ進むことができるように
6. われわれボルネオ人は長く遅れたままでした なぜなら性根が座っていなかったからです
ジャワの皆さん手をつないで下さい ボルネオ人は大変喜びます
7. ジャワ、セレベス、ボルネオそしてスマトラ わたしたちの義務は兄弟関係を結び始める
ことです インドネシアという名は散らばった島々を意味します わたしたちの場に宗教
をひろげましょう⁽³²⁾

この詩には、同胞と力を合わせ宗教(=イスラム)を絆として前進しようとするムスリム女性の心情が吐露されているように思える。

次に、バンジャルマシンとアムンタイの状況について見てみよう。1932年の『S・A』1月号にシティ・O. ルスナムが「バンジャルマシンからの声」なる一文を寄稿している。それによると、ジョクジャカルタのムハマディヤ中央本部が3年前1人の宗教教師をバンジャルマシンに派遣した。その教師は最初言葉の違いに苦労しながら、昼間は子どもを教え、夜間は大人に教授した。アラビア文字やラテン文字、さらにはイスラムに関する事柄を教えた。夜間、初めは男性のみであったが、次第に女性も加わり、熱心に勉強するようになった、とある⁽³³⁾。管見の限りでは、バンジャルマシンのアイシャ支部がいつ発足したのか明確ではないが、上記熱心に勉強した女性達がアイシャの中核となったのではなかろうか。一方、アラビオでは1932年12月25日、アイシャ支部発足の集会在開かれている。約100人の会員が参加し、支部役員として、支部委員長H. サディヤー (Sa'dijah)、支部副委員長H. マスティアー (Mastiah)、第一書記H. ハフサー (Hafsah)、第二書記サルビア (Salbiah)、会計H. マスフィアー (Masfiah)、委員アスマー (Asmah)、マナウィアー (Ma'nawiah)、ハディジャー (Chadijah)、アイシャ ('Aisjah)、H. マスタニヤー (Mastanijah)、ハサナー

(Hasanah) の計11名を選出した⁽³⁴⁾。尚、1932年5月1日～7日までマカッサル（南セレベス）で開かれた第21回ムハマディヤ会議に於いて、アイシヤもダイラーとコンスル制を導入、ソロ、パニユマス、プカロンガン、パスルアン、スマラン、北スマトラ、ランボンーパレンバン（南スマトラ）、ミナンカバウ（西スマトラ）の8ダイラーにコンスルを置いた⁽³⁵⁾。勿論、南ボルネオではアイシヤはまだ産声を上げたばかりであったので、コンスルが置ける状態ではなかった。

しかしながら、1934年になると南ボルネオのアイシヤも体制を整え、コンスルはまだ誕生していないが、ダイラーが認められ、アラビオに於いて地域委員会を開催している。7月18日～23日まで開かれたこの委員会には、アラビオ支部9名、ジャランクンタン準支部2名、ハンブク準支部2名、ランタウ準支部3名、カラン・インタン準支部1名、バンジャルマシン支部2名、クアラ・カプアス支部2名、マンドゥマイ準支部1名の計22名が参加した。この委員会の目的は、来る9月22・23の両日アラビオで開催する南ボルネオ地域アイシヤの公開集会にむけての準備の為であった。公開集会はこれまで地道な活動を続けてきたアイシヤが南ボルネオ地域で初めて開く大がかりなもので、南ボルネオの人々にアイシヤ運動を広くアピールすることがねらいであるとともに、翌年開催される第24回ムハマディヤ会議に向けての前哨戦の意味もあった。この公開集会には約1,500人のムスリム女性が参加、アイシヤ会員を中心とする女性達が活発な討論を展開した。特に、女性ならではの料理の事とか子育てに関する事、あるいはアダット（慣習法）とイスラムの関係について等々の問題が話し合われた。そして最後に、アイシヤ会員達はアイシヤ南ボルネオ地域委員長にアラビオの委員であったシティ・ハディジャーを、書記にシティ・アミナーをそれぞれ選出し、2日間の日程を終えた⁽³⁶⁾。

公開集会及びムハマディヤ会議は南ボルネオのアイシヤ会員にとっての一大イベントであったが、アイシヤ運動をピーアールするためのまたとない機会となるとともに、アイシヤが南ボルネオに於いて確固たる基盤を築いたことを知らしめるための場ともなったことは確かなようである。その後『S・A』での南ボルネオのアイシヤに関する記事はしばらく途絶える。1940年版の『S・A』にアラビオ支部のアイシヤが紹介されている。それによると、アラビオではアイシヤがムスリム成人女性のための学校を開き、ジョクジャカルタのムハマディヤ女子師範学校で教鞭を執っていた教師を招いたとある。授業は週3日間午後2時～4時半まで行われ、近隣の地区から30名内外の女性を通い、イスラムについて学んでいる⁽³⁷⁾。以上が、南ボルネオに於けるアイシヤ運動の概略である。

おわりに

これまで見てきたように、南ボルネオのムハマディヤ運動は1920年代の後半から始まり、30年代に一つのピークを迎える。ムハマディヤ運動の歴史を紐解くと、ジャワを起点としスマトラに及び、相前後してセレベスとボルネオに至る。ジャワ、スマトラそしてセレベスに関しては、先学によりムハマディヤの歴史がある程度解明されているが、ボルネオに関してはまだ手つかずの状態であったため、本稿で取り上げた次第である。加えて、アイシヤの研究はまだ殆どなされていない現状であるので、南ボルネオの事例で考察を試みた。

南ボルネオの人々が何故にイスラム改革運動を受け入れたのか。それは、主として都市の商工業者あるいはウラマー（イスラム教師）を中心とするムスリムのインテリ層が改革運動の中にイスラム社会の近代化の可能性を見出したからではあるまいか。特に、西歐式のカリキュラムを導入した学校教育を重視するムハマディヤの方針が旧来のイスラム塾で行われていた伝統的なイスラム教育に物足りなさを感じていた人々の心を引きつけたとも言えよう。それはまた、ムスリム女性にとっ

でも同様であったと推測される。

ともあれ、南ボルネオがムハマディヤ運動ひいてはイスラム改革運動の拠点の一つになったことだけは、確かなようである。最後に、イスラム伝統派の団体ナフダトゥル・ウラマの動向についても検討の必要があるが、ここでは触れることができなかったので、将来の課題としたい。

註

- (1) 拙稿「インドネシアのイスラム改革運動における教育と近代的ムスリム像について」『史学研究』第196号、1992年。
- (2) Drs. Suratmin, Nyai Ahmad Dahlan, Departemen Pendidikan Dan Kebudayaan/Proyek Inventarisasi Dan Dokumentasi Sejarah Nasional, 1981/1982. 及び Baroroh Baried, *Modernization of Indonesian Women*, ed. by Taufik Abdullah, *Islam and Society in Southeast Asia*, 1986. 等があるが、まだ不十分である。
- (3) Seminar Sejarah Kalimantan Selatan (Bagian Sejarah Islam), Kantor Wilayah Dep. P Dan K Propinsi Kalimantan Selatan, 1976.
- (4) K. H. Saifuddin Zuhri, *Sejarah Kebangkitan Islam Dan Perkembangannya Di Indonesia*, P. T. Alma'arif, Bandung, 1979. p.386.
- (5) M. Idwar Saleh, Banjarmasin, Musium Negeri Lambung Mangkurat Provinsi Kalimantan Selatan, 1981/1982. p. 4.
- (6) K. H. Saifuddin Zuhri, *op. cit.*, p.398.
- (7) 末永 晃『インドネシアの歴史』鳳書房、1980年、p.195。
- (8) Helius Sjamsuddin, *Islam and Resistance in South and Central Kalimantan in the Nineteenth and early Twentieth Centuries*, Edited by M. C. Ricklefs, *Islam in the Indonesian Social Context*, Monash University, 1991, p.10.
- (9) Deliar Noer, *The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900–1942*. Oxford University Press, Kuala Lumpur, 1978, pp.231–232.
- (10) Centraal Kantor voor de Statistiek, *Indisch Verslag*, 1931–1934, p.22.
- (11) Helius Sjamsuddin, *op. cit.*, p.10.
- (12) Yusuf Abdullah Puar, *Perjuangan dan Pengabdian Muhammadiyah*, Pustaka Antara PT, Jakarta, 1989, pp.93–94.
- (13) Alfatch, *Moehammadijah b/g Taman Poestaka Soerakarta*, 1940.
- (14) *Ibid.*, p. 2.
- (15) Peringatan Congres Moehammadijah kel8 di Solo, Soeara 'Aisjijah, *Pengoeroes Moehammadijah Aisjijah*, 1929, p.40.
- (16) *Sejarah Pendidikan Daerah Kalimantan Selatan, Inventarisasi Dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah Kalimantan Selatan*, Banjarmasin, 1980/1981, p.62.
- (17) 前掲拙稿, p. 45.
- (18) Solichin Salam, *Muhammadiyah dan Kebangunan Islam di Indonesia*, N. V. Mega, Djakarta, 1965, p.66.
- (19) Alfatch, *op. cit.*, p. 2.
- (20) Solichin Salam, *op. cit.*, p.66.

- (21) Sejarah Pendidikan Daerah Kalimantan Selatan, op. cit., p.61.
- (22) Berita, Pengadjaran Moehammadijah Hinsia-Timoer, 1930, p.44.
- (23) Pemandangan Alam Islam dan Moehammadijah, H. B. Moehammasijah, Djokdjakarta, 1932, p.134.
- (24) Soeara Moehammadijah, No.11 Maart 1936, Hoofdbestuur Moehammadijah di Djokdjakarta, p.203.
- (25) Soeara Moehammadijah, op. cit., No.3 Juni 1935., pp.90-104.
- (26) Moment Verslag, Poetoesan Congres Moehammadijah ke24 di Bandjermasin, Pengoeroes Moehammadijah, 1935, pp.3-5.
- (27) 拙稿「中部ジャワ北岸のムハマディヤ運動」『史学研究』第203号、1993年、p.50.
- (28) Solichin Salam, op. cit., p.87.
- (29) Soeara Aisjijah, No.1-4 September 1929, Moehammadijah BG. Aisjijah Hindia-Timoer, Djokdjakarta, p.27.
- (30) Soeara Aisjijah, No.9 Februari 1930, op. cit., p.130.
- (31) Soeara Aisjijah, No.1 1932, op. cit., p.74.
- (32) Soeara Aisjijah, No.1 1932, op. cit., p.61.
- (33) Soeara Aisjijah, No.1 Januari 1932, op. cit., p.13.
- (34) Soeara Aisjijah, No.1-2 Januari 1933, op. cit., p.31.
- (35) Soeara Aisjijah, No.7-8 1933, op. cit., pp.188-189.
- (36) Soeara Aisjijah, No.1 1935, op. cit., pp.4-11.
- (37) Soeara Aisjijah, No.7 juni 1940, p.433.